

語頭アクセントに注目した 日本語アクセントの習得

—— 広東語話者の場合には ——

安 原 順 子

1. はじめに

日本語学習者への音声指導に求められるものは、日本人と同じ発音を目指そうという考え方から、日本語らしい発音へ、そして、日本人に評価されるような発音の指導へと姿を変えつつある。たとえば、アクセントについて言えば、日本語母語話者のすべてが、東京語アクセントを習得しているというわけではない。しかし、外国人に教える日本語としては、やはり、東京語アクセントの習得を音声の学習の一つとして考えざるを得ない。外国人が習得すべき東京語アクセントの特徴の一つに、語頭では第一拍目と第二拍目は高さが異なることが挙げられる。すなわち、語頭のアクセントは、高低かまたは抵高となるということである。

この語頭の東京語アクセントを習得することは、外国人ばかりでなく、東京語話者以外の日本人が東京語アクセントを習得しようとする際にも、問題になることが多い。外国人が語頭から平らに高い正しくないアクセントを、語頭において高さが異なるように発音しようと努力するのは、東京語話者以外の日本人、たとえば、近畿方言話者が東京語アクセントを習得しようとする際に、語頭のアクセントを高さの異なるアクセントにしようとするのと、同様の努力が必要なのではないのだろうか。それは、この語頭アクセントの習得により、「日本語らしい」アクセントを話せるという印象を相手に与えることができるのだと考えられるからである。

そこで、本稿では、日本語の語頭アクセントとその習得状況について、どのようなアクセントの誤用があり、どのように習得が進むのかを、広東語を母語とする日本語学習者を例に、その語頭アクセントを取り上げ、アクセントの習得状況を観察した。

2. 先行研究

広東語母語話者の日本語アクセントについての先行研究には、野田・重松(2000)などの一連の研究や安原(2004)などの研究がある。しかし、安原(2004)でも考察したよう

に、東京語のアクセントの習得において、二拍から四拍までの拍数のアクセントについては、

「低く出る」というアクセントよりも、高低となる「高く出る」アクセントのほうがより多く見られる。

これは、声調語を話す広東語話者の一つの特徴としてあげてよいものである。しかし、この語頭のアクセントが、どのように習得されるのかは、未だに明らかになってはいない。外国人の日本語学習者が日本語らしい音声で話すためにはどうすればよいのか、また、高く平らなアクセントを修正するためにはどのようにして低アクセントから始まる必要があるのかどうかについては、さらに考察が必要である。

3. 本研究の目的

松崎(2004)によると

評価研究で得られた成果を教室でどのように生かすか、という提言に関しては、結果の一般化がどこまで可能なのかという保証の問題が関係してくる。どこまで一般化できるかという問いは、その研究における「考察・提言」が飛躍しすぎていないか、という問いにつながる。

そして、そこには、

「たまたまその人の発音だったから」あるいは「その文・語」だったからその結果になったのではないかという疑問が生じることになる。

結果の一般化には、困難が伴う。しかし、多くの調査・実験結果を得ることにより、傾向をつかむことはできるはずである。そして、確かに、母語を同じくする日本語学習者には、共通したアクセントの特徴が存在する。

また、音声、特にアクセントの評価については、次のように述べている。

一般人は意味がわかる範囲での文法ミス、アクセント・イントネーションの不自然さをそれほどマイナスと捉えない、という結果がある。

実際、筆者の経験でも、外国人の音声を録音されたものを聞いて、評価を書き込んでもらった結果は、単音や特殊拍に関するものが全てで、アクセントやイントネーションの誤りに関しては、ほとんど言及がなかった。これには、やはり松崎(2004)の指摘するような「変だと思うが、何が変わるのか説明できないため指摘しない」「指摘できないことはないが、数が多すぎるので指摘しない」ということに加えて、学生自身のアクセントの問題、すなわち、東京語圏出身ではないため「自分のアクセントにはっきりした自信がもてない」ということもあるかもしれない。しかし、それがすぐに外国人への音声指導にはアクセントが必要ではないということにはならないだろう。日本語らしくない発音であるということを感じているのだから、その違和感を何とかして少しでも軽減しようという試みは、や

はり必要なのである。

その違和感の一つに、日本語話者も習得に困難であるという、語頭の低起アクセントがある。そこで、本稿では広東語話者の日本語の語頭アクセントを取り上げて考察してみた。

^{注2} 杉藤 (1997) によれば、大阪市を中心とする近畿方言話者には、アクセントのゆれが観察されるという。しかし、 $\overline{\text{○○}}$ と $\underline{\text{○○}}$ のゆれは少ない。「ゆれ」が少ないという事実は、これら近畿方言話者が東京語のアクセントの習得を目指す場合にも、語頭の低高アクセントの習得には、困難さがつきまとうと考えてよいのではないだろうか。この「ゆれ」が少ないという事実は、なぜ多くの外国人日本語学習者が、日本語の低高アクセントが苦手なのかを示唆しているように思える。

また、崔 (2003) の考察によれば、語頭子音の有声・無声性がピッチ制御に関与し、語頭子音の有声生が語頭だけでなく、ピッチの全般的な制御に関係しているという。また、同時に、第二モーラに特殊モーラがきた場合には、低いはずの語頭が高くなり、「高・高」のパターンとなるという東京語アクセントの特徴が指摘されている。つまり、語頭のアクセントはその後に含まれる特殊モーラと高い相関関係にあると結論付けられている。

^{注3} ただし、安原 (2003) でも、声調話者の音声を取り上げ、その中では特殊拍とともに高く平らな、または高低のアクセント型を取り上げている。しかし、同一人物のアクセント習得の経緯については述べられてはいない。そのため、本稿では、広東語話者のアクセント習得がどのように行われるのかを、二年間と三年間に渡り観察した例を取り上げて考察する。

4. 調査方法

調査の方法は、次の通りである。

以下の二通りの調査を行い、それぞれ下線部の単語アクセントを分析・考察した。どちらのグループも、被験者は広東語話者の日本語科大学生で、それぞれ二種類の文章を音読してもらい、それを録音しアクセントの分析を行った。録音場所は、グループⅠが二年間連続して二回の録音を、広州市内の大学施設で行った。また、グループⅡは三年間連続して三回の録音を、最初の二年間は広州市、三年目は日本国内で行った。日本語学習歴は、それぞれ最終録音年で二年から三年である。

^{注4} 音読に使用した文章は、『新聞で学ぶ日本語』の「5.2 空き教室転用の高齢者福祉施設」、「5.3 充実する海外学式ツアー」である。この調査は、一回のみアクセントの分析を行うのではなく、同じ学習者の音声毎年分析することで、そのアクセント習得の変化を観察することができると考え実施したものである。

さらに、このように二通りの実験を行うのは、特に、観察期間が二年から三年に変化した場合に、アクセントの習得には差が見られるのかどうかという問題と、一級試験の合格

および日本留学の成果がアクセントの習得に反映されるかという問題に答えを出すためでもある。

グループⅠ 11名の広東語母語話者である中国人学生を二年間観察

日本語科二年生と、三年生時に、毎年一回ずつ同じ文章を音読してもらい、これを録音し、そのアクセントを分析した。

一年目	日本語科二年	広州市
二年目	日本語科三年	広州市

グループⅡ 2名の広東語母語話者である中国人学生を三年間観察

大学入学当時から日本留学中の現在に至るまで、三年間にわたって毎年一回ずつ同じ文章を音読してもらい、これを録音し、そのアクセントを分析した。

一年目	日本語科一年	広州市
二年目	日本語科二年	広州市
三年目	日本語科三、四年	日本留学中

使用した文章は、以下の文章で、これらの文章をそれぞれ一度ずつ音読してもらい、それを録音して、下線部の単語についてそのアクセントを分析した。

^{注5}「A 空き教室転用の高齢者福祉施設」

結婚式を海外で挙げる人が増えるのを見越して、旅行会社が海外挙式ツアーの内容を充実させている。昨年海外で挙式した日本人カップルは三万五千組と推定され、一九九〇年の約三倍である。行き先はほとんどがハワイ、オーストラリア、グアム。カップル以外の同行者は平均五人で、近親者だけで渡航する例が多い。担当者は人気の理由を、おしゃれなイメージに加えて、国内での挙式より安上がりで、しきたりやしがらみを敬遠する若者の気分に合っているからだとしている。

「B 充実する海外挙式ツアー」

京都府のある小学校に、児童数の減少のためできた空き教室を転用した高齢者福祉施設ができた。全国初の試みだが、もうすぐ一年になる。初めは校内で出会うお年寄りにとまどっていた児童も、今では昼休みや放課後に施設に出かけ、手伝いをしたりいっしょにゲームをしたりしている。児童たちは「お年寄りがとても物知りなので驚いた。方言や手芸などを教えてくれるので楽しい」と毎週の交流の日を心待ちにしている。

(5)

5 . 結果^{注6}

	S 1		S 2		S 3		S 4		S 5		S 6		S 7		S 8		S 9		S 10		S 11	
	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
あき																			×			×
ぜんこく			×	×	×						×	×			×	×					×	
はつ											×				×							
てつだい			×		×		×		×				×		×		×		×		×	×
ものしり																						
ほうげん	×	×	×	×	×		×	×	×	×	×	×			×	×	×			×	×	×
しゅげい	×	×					×		×		×	×	×	×	×		×	×				×

表1 グループⅠ 空き教室転用の高齢者福祉施設^{注6}

	S 1		S 2		S 3		S 4		S 5		S 6		S 7		S 8		S 9		S 10		S 11	
	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
かいがい	×																×				×	
あげる	×	×	×		×	×	×	×			×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
させている	×	×	×	×	×	×	×	×			×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
きょしき		×	×		×	×		×	×	×		×		×	×	×	×	×	×	×	×	×
ハワイ		×			×		×	×			×	×	×		×						×	
ごにん					×	×	×								×	×			×		×	×
おおい																						

表2 グループⅠ 充実する海外拳式ツアー

	S 12			S 13		
	1	2	3	1	2	3
あき				×		
ぜんこく		×				
はつ	×	×				
てつだい	×	×		×		
ものしり		×	×	×	×	×
ほうげん	×	×				×
しゅげい	×			×	×	×

表3 グループⅡ 空き教室転用の高齢者福祉施設

	S 12			S 13		
	1	2	3	1	2	3
かいがい						
あげる	×	×		×		
させている		×		×	×	×
きょしき		×	×			×
ハワイ		×	×	×	×	
ごにん						
おおい						

表4 グループⅡ 充実する海外拳式ツアー

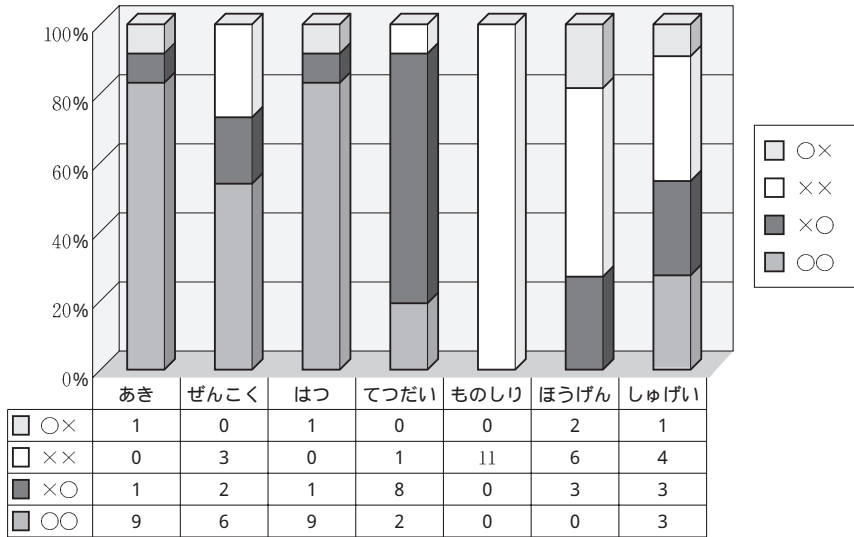


表5 グループⅠ 空き教室転用の高齢者福祉施設

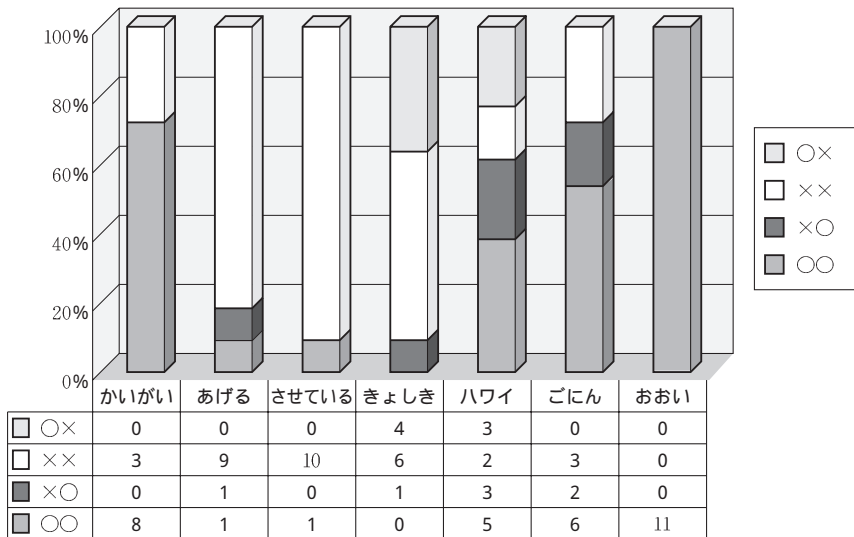


表6 グループⅠ 充実する海外拳式ツアー

(7)

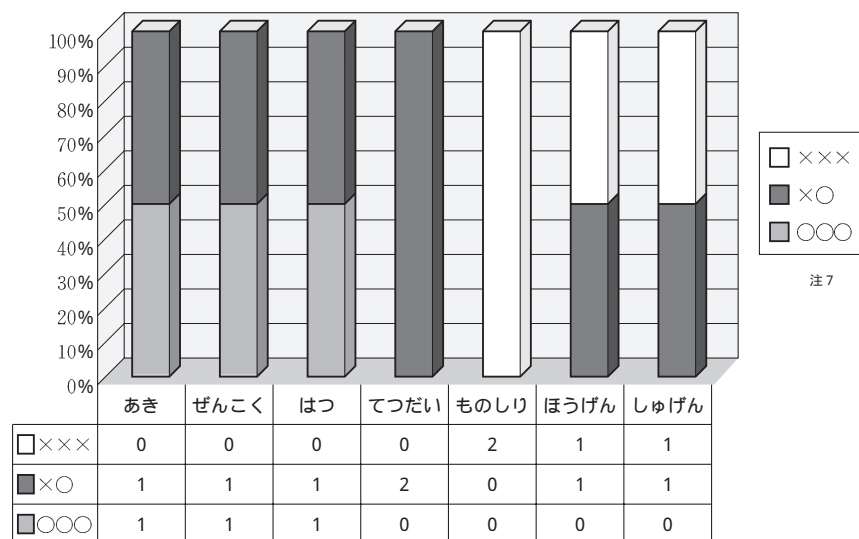


表7 グループⅡ 空き教室転用の高齢者福祉施設

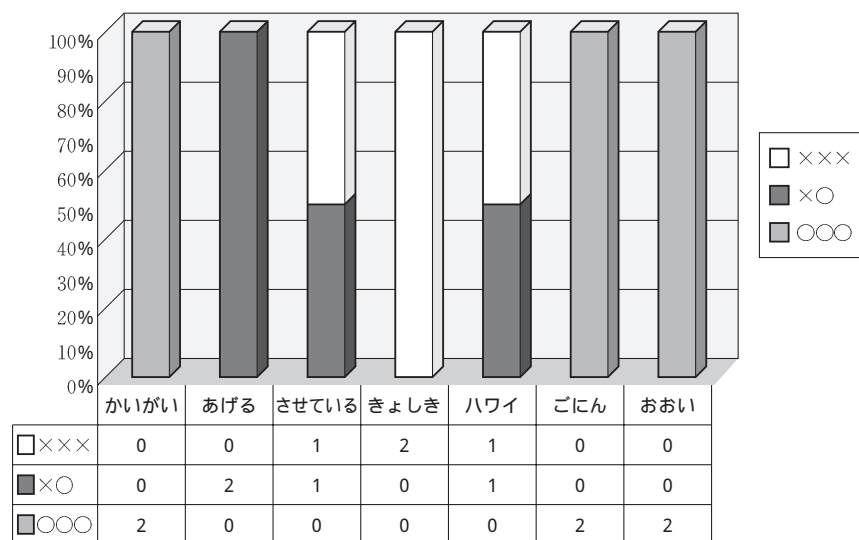


表8 グループⅡ 充実する海外拳式ツアー

それぞれ以下のような誤用の型が現れた。これらの誤用の型は、グループⅠとグループⅡ^{注8}のどの被験者にも共通して多く現れた型であった。

日本語のアクセント

広東語話者のアクセント

- | | | | |
|---|-------------------------|---|-------------------------|
| 1 | か <u>い</u> がい | → | かい <u>がい</u> |
| 2 | あ <u>げ</u> る | → | あ <u>げ</u> る |
| 3 | さ <u>せ</u> て <u>い</u> る | → | さ <u>せ</u> て <u>い</u> る |
| 4 | き <u>ょ</u> し <u>き</u> | → | き <u>ょ</u> し <u>き</u> |
| 5 | ハ <u>ワ</u> イ | → | ハ <u>ワ</u> イ |
| 6 | ご <u>に</u> ん | → | ご <u>に</u> ん |
| 7 | お <u>お</u> い | → | お <u>お</u> い |

日本語のアクセント

広東語話者のアクセント

- | | | | |
|---|-----------------------|---|-------------------------|
| 1 | あ <u>き</u> | → | あ <u>き</u> |
| 2 | ぜ <u>ん</u> こく | → | ぜ <u>ん</u> こく |
| 3 | は <u>つ</u> | → | は <u>つ</u> |
| 4 | て <u>つ</u> だ <u>い</u> | → | て <u>つ</u> だ <u>い</u> |
| 5 | も <u>の</u> し <u>り</u> | → | も <u>の</u> し <u>り</u> な |
| 6 | ほう <u>げ</u> ん | → | ほう <u>げ</u> ん |
| 7 | し <u>ゅ</u> げ <u>い</u> | → | し <u>ゅ</u> げ <u>い</u> |

6 . 結果

グループⅠとグループⅡの結果から、語頭アクセントの習得について、次のようなことが分かる。

①語頭の低高アクセントの習得は、表1から表8より、日本語学習における自然な習得が困難であることが確認された。語頭の低高アクセントの習得には、その習得について特別な指導が必要である。

②単語アクセントには、誤用が修正されやすいものと、されにくいものが存在する。

「空き教室転用の高齢者福祉施設」の場合

グループⅠとグループⅡの結果から、誤用が修正されなかった例が一番多かったのは、「させている」と「あげる」で、誤用がほとんどない、または少なかった単語は、「おい」と「かいがい」であった。「おい」については、「おおい」と「おおい」のアクセントのゆれがある。本調査では、すべての学習者が「おおい」を選択しているが、これは語頭の高低アクセントは発音しやすいため、間違いがなかったものと考えられる。このように、どちらの型でもよい、アクセントのゆれについて考えれば、外国人学習者は得意な型を選択できるので、間違いが少ない。

「充実する海外挙式ツアー」の場合

グループⅠとグループⅡの結果から、誤用が修正されなかった例が一番多かったのは、「ものしり」「ほうげん」「しゅげい」で、誤用がほとんどない、または少なかった単語は、「あき」「ぜんこく」「はつ」であった。

これより、アクセントの訂正では、語頭の高く平らなアクセントを低高アクセントにするのは、難しいが、

ほうげん → ほうげん

語頭の高低アクセントを低高アクセントにするのは難しいことが分かった。

きょしき → きょしき
しゅげい → しゅげい

③グループⅡでは、グループⅠに比べて、最終的に誤用が修正された例が多く見られたが、三年目の日本留学中にも東京語アクセントの習得が行われたものと考えられる。滞在地は近畿地方であるが、日本に滞在していれば、日本人や日本語に接する機会が多いからであろう。

② アクセントのピッチを、語頭では下げて、その後上げることは不可能ではない。しかし、崔(2003)からも分かるように、語頭が有声音であれば、通常の日本人の発音でも

語頭が「高高」のアクセント型になりやすいことが報告されている。これは、外国人の発音においても、同様の場合、例えば、「ほうげん」というような語においては、「ほうげん」というアクセントでなく「ほうげん」でもかまわないということになる。

③特に、日本語を専門に学習している本研究の被験者のような場合、アクセントの特徴としては、高く出れば次は必ず低くなり、低く出れば次は高くなるということが理論的には分かっている。そのため、語頭を下げる練習ができれば、次の第二拍目はあげることができよう。

7. まとめ

本稿では、語頭に注目した広東語話者のアクセントの型の習得について考察した。その結果、語頭の低高アクセントの習得の難しさは、日本人のアクセント習得における難しさと共通しているところがあることが分かった。

日本語の音声教育には、多くの新しい局面が生まれてきている。その一つは、「音声教育をどのように行えばよいか」という目標について、具体的に考えられ始めてきたことである。また、もうひとつは、日本語教育にも心理学的な側面が取りあげられるようになってきたことである。つまり、日本語学習の際に問題となる学習者の心理状態についての研究が行われるようになったことである。

日本語らしい音声とは何か。日本語らしさというには、どのようなアクセントの習得を目指すべきなのだろうか。このような問題については、さらに考察が必要であるが、それには語頭の低高アクセントを習得することが不可欠である。

今後は、本研究で得た結果を基に、日本語らしい音声の習得について、他の外国人日本語学習者、特に広東語と同じ声調語を母語とする日本語学習者にも応用できるように日本語アクセントの研究を進めていくことにする。

〔注〕

- 1 杉藤(1997)「母音の下降音調とアクセント型の知覚」
- 2 特殊拍を含まない二拍語、三拍語のアクセントは、平板化して、高さが持続するものが多い。また、平板化したアクセントの最後の拍だけが低くなるものもみられる。
- 3 杉藤(1997)によれば、大阪市を中心とする近畿方言話者のアクセント型調査では、単語によって〇〇型と〇〇型、〇〇型と〇〇型、〇〇型と〇〇型、〇〇型と〇〇型のそれぞれの「ゆれ」は見られるが、〇〇型と〇〇型の「ゆれ」は少なく、〇〇型と〇〇型との「ゆれ」は希であるという。この事実からも、語頭の低高アクセント習得の難しさが分かる。

- 4 本文中には、同じ単語が何度か出てくるものがあるが、できるだけ早い段階で単独で現われたものをアクセントの調査対象として取り上げている。
- 5 『新聞で学ぶ日本語』(1997) ジャパンタイムズ
- 6 表中のS1, S2……はそれぞれ被験者である学生を指し、その下の番号1, 2, 3はそれぞれ1年目, 2年目, 3年目を指す。また、空欄はアクセント型が正しいものの、「×」は誤用を示す。
- 7 凡例の「×○」は1年目が2年目に「×」であったものが3年目に「○」に修正されたことを示す。
- 8 「おおい」には「おおい」, 「ほうげん」には「ほうげん」というアクセントも存在する。

参考文献

- 岩田礼(1997)「声調言語に於けるピッチの”上げ”と”下げ”について—タイ語, 蘇州語の筋電図—」『音声研究』第1巻第3号
- 河野俊之他(2004)『1日10分の発音練習』くろしお出版
- 崔 絢喆(2003)『日本語の韻律構造』風間書房
- 杉藤美代子(1997)『音声波形は語る』日本語音声の研究4 和泉書院
- 野沢素子・重松淳(1998)「広東話話者の日本語学習におけるアクセントの問題について(1)長音節を中心にして」『日本語と日本語教育』第27号
- 野沢素子・重松淳(1999)「広東話話者の日本語学習におけるアクセントの問題について(2)一撥音節, 促音節, 二重母音音節を中心にして」『日本語と日本語教育』第28号
- 野沢素子・重松淳(2000)「広東話話者の日本語学習におけるアクセントの問題について(3)開音節を中心にして」『日本語と日本語教育』第29号
- 『日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するか』平成12年度～平成15年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2)研究成果報告書
- 松崎 寛(2004)「発音評価研究の展望」『日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するか』平成12年度～平成15年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2)研究成果報告書
- 水谷 修, 水谷信子(1997)『新聞で学ぶ日本語』ジャパンタイムズ
- 安原順子(2000)「発音レベルを考慮した日本語の発音指導」『神女大國文』第11号
- 安原順子(2003)「声調話者に共通する日本語アクセント—タイ語話者, ベトナム語話者, 広東語話者の場合—」『神女大國文』第14号
- Robert.S.Bauer, Paul K.Benedict (1997) *Modern Cantonese Phonology*, Mouton de Gruyter